



No7 何か変だな、どうしてみんなのようにできないのかな？

— 怠けているんじゃないんだよ —

私は、自分が人となんか違う。みんなが簡単にできることが私にはできない、という不完全さを感じたのは、小学校3年生くらいのときではないかと思います。片づけや集中することができない。忘れものは日常茶飯事。約束を忘れたり、大切なものをなくしたり、ケアレスミスも多く、衝動的な行動をしては失敗する。

なんか変だな～と、ずーっと「生きづらさ」を感じていました。

～ 高山恵子編著 「おっちょこちょいにつけるクスリ」 ぶどう社 より ～

このように、「一つのことに集中しにくい。」「何をやっても失敗して叱られる。」という体験をしやすい子どもたちがいます。

このような子どもたちは、「何故だかわからないけれど、何だかうまくいかない。」というもどかしさを常に抱えながら生活しているのです。「さぼっている」のでも「努力が足りない」のでもありません。周りの人たちは「困るなあ」と思うかもしれませんが、一番困っているは何よりその子自身なのです。



筑波大学の宮本信也先生は、「十人十色なカエルの子」という本の中で、このような子どもたちのことを、“発達の障がい（ハードル）がある子”と表現しています。

障がいというと、たいそう深刻なもののように受け取られてしまうかもしれませんが、障害物競走を思い浮かべると分かりやすいと思います。普通の短距離走のように平坦ではないけれど、決して先に進めないこともないでしょう。それと同じで、「その子に固有のハードルがいくつかあって、それを乗り越えながら成長する子」ということです。（中略）進んでいく道筋は、ほかの子どもたちとは違っているかもしれません。時には、**発達のハードル**に行く手をはばまれて、先に進めないのではないかと感じてしまうことだってあるでしょう。しかし、見方を変えれば、人にはない“特徴”を持って、ユニークな成長のしかたをする子どもたちともいえるのです。～ 落合みどり 著 宮本信也 医学解説「十人十色なカエルの子」東京書籍 ～

人は一人ひとりみんな違います。違っていることは、劣っていることではありません。でも、違っていることで困ってしまうことがあるならば、困ることができるだけ少なくなるように、何か手助けができるのではないかと、子どもに寄り添いながら一緒に考えてほしいのです。